

## 馬獣医のよもやま話③7 敷地光盛獣医師

### “カイカイ”のおはなし

浦河診療所 敷地光盛

平成12年 日高軽種馬農協入社

繁殖シーズンも終了し、日高では暑い日が続いていますが、皆様はいかがお過ごしでしょうか？この時期はアブなどの虫が多く、虫を避けるために夜間放牧をされている方もいらっしゃるかと思います。今回は、昆虫が関係すると言われている皮膚病“夏癬”について紹介させていただきます。別名の“カイカイ”や“オムシ”と言ったほうがピンと来る方が多いかもしれません。たてがみや尾根部（写真1）を中心に発生し、激しい痒みから馬栓棒や牧柵に体を擦りつけ脱毛や炎症を起こす、昔からお馴染みであり憎らしい皮膚病です。寄生虫の体内移行がその原因とされた時期もありましたが、現在は昆虫の唾液中に含まれるタンパク質に対するアレルギー症であることがわかっています。日本では5%ほどですが、オーストラリアのクイーンズランドではなんと60%の馬が罹患しているそうです。海外ではヌカカという1mm程の蚊の一種が原因とされています。

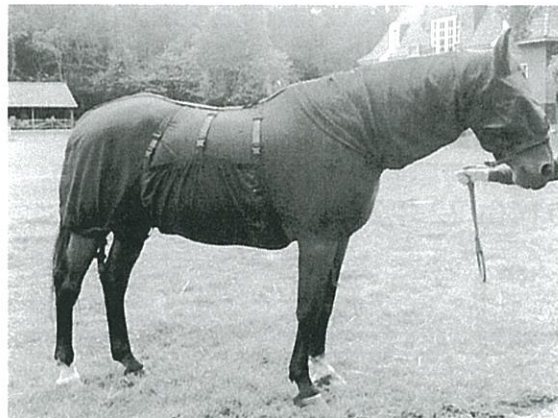


(写真1) 尾根部の脱毛

当組合で2005年に30頭の夏癬馬と10頭の正常馬、70種類の抗原（アレルギーの原因物質）を使って調査した研究では、夏癬馬では2種類以上の抗原に対してアレルギーがあり、中でもサシバエとクロアリが最も原因として疑わしい結果が得られました。

完全に治すことが出来る治療法は未だありませんが、世界中の研究者がこの病気を研究しており、その成果の一部を紹介したいと思います。カナダのグループは、オメガ-3脂肪酸を豊富に含む亜麻仁油の給餌が皮膚のアレルギー症状を和らげることを報告しています。スイスの研究者は、一部の抗ヒスタミン薬は効果がなく、専用の馬服（写真2）や虫が活発な時間帯の舎飼いが効果的だとしています。また、アメリカの臨床獣医師は、ステロイドの全身投与や患部に局所麻酔薬を含んだ塗薬を使用するそうです。私もよく軟膏を利用しますが、乾燥を予防することだけでも痒みを軽減することができます。ベルギーの大学では夏癬に関係する抗体を用いた診断方法が研究され、92%の確率で診断出来るそうですが、普及には5～10年かかるということです。

“カイカイ”の解決はまだまだ先のようです。それまでは、予防や対症療法でしのぐほかなさそうですね。



(写真2) 夏癬防止用の馬服 (the HORSEより引用)